

特別展

会津を愛した版画家

齋藤清のあゆみ 福島県のコレクションから

Love for Aizu region Kiyoshi Saito from the collections in Fukushima Prefecture

2013年4月19日(金) - 5月26日(日)

福島県会津坂下町出身の齋藤清(1907-1997)は、近代日本を代表する版画家の1人です。幼い頃に北海道に移り住んだ齋藤は絵画にひかれ上京し、独学で絵画や版画を学びました。1951年にはサンパウロ・ビエンナーレで、木版画の《凝視(花)》(1950) [図1] を発表し、駒井哲郎と共に在サンパウロ日本人賞を受けました。これは国際展における日本人初の受賞であり、大きな注目を集めます。その後も各地で出品や受賞を重ねて、世界的に評価を高めました。

ビエンナーレ受賞後の作品を見ると、日本や外国を斬新な造形感覚で捉えています。日本については、ハニワや土器、そして京都の風景や建築、奈良の仏像などを描きました。そして米国、メキシコやヨーロッパを訪ねて、風景や日々の生活、人々を作品にしています。1970年以降は「会津の冬」と題する作品を、逝去するまで制作しました。雪が降っており、自然、町並み、生活そして人通りを伝えます。この展覧会でも、戦前に制作した《会津の冬》3点(1938-40頃)から、多くの作品が制作される契機になった《会津の冬(1)》(1970) [図2] を経て、晩年の《会津の冬(115) 西会津・軽沢》(1996)まで、抜粋のうえで紹介します。会津に生まれ、会津を思い、そして晩年には会津に在住した画家の代表作をごらんください。冬を描いた作品のほか、春から秋までの会津の四季を描いた作品も展示します。

齋藤清は一般的には木版画家として知られていますが、画業からは木版画だけではなく多彩さが見られます。コラグラフと呼ばれる作品は、絵の具以外の物質を画面に持ち込み、貼り付けたうえで、絵の具を刷り込んでいます。通例の木版画とは大きく印象が異なり、変化に富んだ質感と自由な形態表現が興味深いです。そして版画だけではなく、《会津の冬、柳津・大野(1)》(1983) [図3] のように、描線と色合いが印象的な水墨画を多く制作しています。この展覧会では「会津の冬」のほか、神仏を描いた作品など、水墨画の作品を含めました。またこの展覧会を見ると、《ハニワ》(1953) [図4] など、6点の作品が二曲屏風になっているところがおもしろいです。

この展覧会では、木版画の制作を始めた1930年代から晩年の1996年まで、221点の作品から、齋藤清の画業を回顧します。東日本大震災で大きな被害を受けた、福島県立美術館(福島市)と、やないづ町立齋藤清美術館(柳津町)などから作品を拝借するものです。

【学芸員 廣瀬就久】



図1 《凝視(花)》1950 紙・木版 福島県立美術館 ©Kiyoshi Modern Art



岡山県立美術館

OKAYAMA PREFECTURAL MUSEUM OF ART

岡山県立美術館は平成25年3月18日で開館25周年を迎えました。

未来を遠望する「岡」と、躍動性を内に秘めたたたずまい

岡山県立美術館シンボルマークとロゴタイプのデザイン

原 研哉



2010年に岡山で国民文化祭が開催された折、館長の鍵岡正謹さんから県立美術館のロゴタイプをつくってほしいと依頼された。郷里岡山の美術館であるから躊躇なくお引き受けした。ただ、制作に取りかかるまでしばらく迷った。岡山はきれいな街である。きれいな郷里を過剰なデザインで汚染したくない。派手なロゴなどむしろないのも、岡山らしく潔癖でいいかもしれないとも思っていたのだ。

一方、建築とその施設を視覚的に象徴するマークやロゴは大切なアイデンティティの源泉である。イメージの依り代としてうまく機能させれば、より多くの人々の期待やときめきを呼び集めることが出来るかもしれない。そう思い直し、姿勢を正して制作に向かった。

岡山県立美術館の建築は、最高裁判所などで有名な建築家、岡田新一の設計によるものである。その印象は四角く格調があり重厚である。昨今の若手の建築家のような軽みはない。場所も岡山の文化ゾーンの中核、天神地区にある。僕は、幼少期は隣接する弓之町で過ごし、中学・高校もこの地区を拠点に動き回っていたので、場所の雰囲気はわかる。かつては東警察署がここにあったと記憶している。

シンボルマークは「岡」の文字と建築の四角い量感とを掛け合わせたイメージである。遠くを見通すような人の顔にも見えるかもしれない。立体的な奥行きを持つマークの簡潔な造形は量感のある四角い建築とよくなじむはずである。

ロゴタイプは、文字を幾何学的に整理して現代性と楽しさ、静的ではあるが躍動性を内に秘めたたたずまいを意識している。マークとロゴタイプの組み合わせを「シグネチャー」と呼ぶが、くつきりと視認性のいいシグネチャーは、小さく用いてもずっと目を引き、ポスターやチケット、ウェブサイトなどの上で、いい働きをしてくれるのではないかと思っている。

岡山県立美術館が出来たのは1988年。僕が岡山を離れて約十年後のことである。当時はまだ駆け出しのデザイナーであった。少し仕事ができるようになるまで待っていてくれたのかもしれない。そういう意味では満を持して、岡山県立美術館にこの仕事を捧げたい。



©Yoshiaki Tsutsui

略 歴

1958年生まれ。デザイナー。日本デザインセンター代表取締役。武蔵野美術大学教授。独自の視点から日常や人間の諸感覚に潜むデザインの可能性を提起。近年は日本の産業の潜在力を世界に提示する仕事に注力している。東京ADC賞グランプリ、毎日デザイン賞他、内外で受賞多数。2011年に北京を皮切りに個展を中国に巡回。著書に、『デザインのデザイン』(岩波書店/2003)、『日本のデザイン』(岩波書店/2011)。

平成24年度 展覧会スケジュール(3月-7月)

特別展	会津を愛した版画家 齋藤清のあゆみ 福島県のコレクションから	4月19日(金) - 5月26日(日)
	美作国建国1300年記念協賛展 美作の美術展	5月31日(金) - 6月30日(日)
岡山の美術展	おかやまアート・コレクション探訪Ⅴ 野崎家コレクションⅡ - 個性集う地方サロン-	3月5日(火) - 4月7日(日)
	漆芸家難波仁斎 生誕110年記念回顧展	6月7日(金) - 7月15日(月・祝)

編集後記

美術館ニュース100号をお届けします。今年で岡山県立美術館は開館25周年、そしてこの美術館ニュースも100号というおめでたいことが重なり大きな節目を迎えたと感じております。岡山県立美術館のシンボルマークとロゴタイプも誕生し、今後、これらとともによりいっそう当館の魅力を知っていただけるよう努めて参ります。最後になりましたが、シンボルマークとロゴタイプをデザインして下さった原研哉氏に心より御礼を申し上げます。

【o.m.】

美術館ニュース 第100号

発行：2013年3月

発行者：岡山県立美術館
〒700-0814 岡山市北区天神町8-48
TEL：086-225-4800
Email：kenbi@pref.okayama.lg.jp



NEW LETTER

開館25周年に寄せて



牧谿《老子図》重要文化財

岡山県立美術館が25周年を迎えました。ひとりの人間の生涯をたとえますと25歳となり、立派な青年に成長し働き盛りを迎えます。ただ人類の長い営みである文化という厚い層というか蓄積からみますと、たった25年なのかとも感じます。だからこそと言いますか、文化的な営為は継続する力こそが、さらに必要であると、25年が経ち改めて感じます。

25年という年期は一世紀百年からしますと四半世紀ということになります。四半世紀と言葉にしますと、いよいよ世紀も四分の一を経過したのだという時間の重みも感じます。

実際、25周年・四半世紀を経た美術館を振り返り、歴史年表をめくるだけでずいぶんと色々な社会現象や事頂があったものだと感心してしまいます。私たちの岡山県立美術館が開館した昭和63(1988)年には、新岡山空港が開港し、瀬戸大橋が開通する大きな事業があり、岡山はいよいよ交通の重要な拠点となりました。「交通」は文化にとりましても大切な要素です。こうした中で誕生した県立美術館は、画聖と呼ばれた雪舟が代表する“水墨画という東洋の美術”を収集の一つの柱にするというスケールの大きな気概を發揮し、館をスタートさせました。

幸いにも25周年を迎えた本年、所蔵する牧谿の《老子図》が国の重要文化財に指定されることになりました。豊潤で優美な中国宋代の水墨画家が、東洋思想家・老子を描いています。それも鼻毛がのびたユーモラスな人物画の傑作です。そこには現在の日中間の不安な蟬りを飛ばしてしまう楽しい絵画の力があります。美術は「交通」、すなわち文化交流・人間と物質の交流でもあります。ほんの県立美術館の一端の紹介ですが、美術には大きな力があると思いますし、美術館の大切な役割の一つです。

こうして先人たちが努めてこられ25周年を迎えた年にあたり、岡山県立美術館のロゴ・マークを制作していただきました。原研哉という岡山出身の日本を代表するデザイナーで、文化は地域に育つと明言するデザイナーが、文化力をためた明快なロゴ・マークを制作してくれました。かねてから岡山県立美術館にCI(コーポレート・アイデンティティー)が必要であると思っていました。岡山から日本はもとより世界に向かって発信するための、美術館にとってのCIです。

このロゴ・マークのもとに目覚め活性化して美術館は、新たに迎える四半世紀を歩みだしたいと思います。伝統の蓄積と現在の創造を両翼にして進んでゆきたいと思います。

現在は、大震災を経てあらゆる側面で根本的に変更をせまられる時代が来ています。だからこそ、気持ち新たに、皆さまがたとともに25周年を迎えたいと思っています。

岡山県立美術館ニュースもまた、目出度く100号を迎えます。

【館長 鍵岡正謹】

開館当時を振り返って

1985年4月、美術館開設準備事務局が知事部局に設置されました。総括は前副知事で初代館長を務めた故小野年之氏。学芸員は30代半ばの私1人。もともとそれに先立ち、文化振興事業室という部署の一角で学識経験者や建築課職員、県立博物館本務の私を含めて6人のメンバーで美術館構想を検討中でした。

事業室では、岡田新一氏から提出済みの建築の基本構想を館の運営方針と整合させて基本設計へ進むということが求められました。当初三層であった展示室を二層に変更するという荒技も繰り出しました。県の意向で1階部分を取り払う代わりに岡田氏の新たな着想を得て地下展示室の天井を上げたのです。旧プランでは今とは随分違った印象の館になっていたことでしょう。

事務局では学芸員の採用にも従事し、86年に妹尾・宮本、87年に上西・川延の諸氏が加わりました。皆でわいわいと遅くまで収集活動や館内の備品整備、警備システムの構築、開館展とそれに続く展覧会の準備などに取り組み、何とかオープンにこぎ着けた次第。業界でささやかれていた「美術館を作ったら学芸員が倒れる」というジンクスは幸い誰にも的中しませんでした。事務職員との協力態勢が整っていたことも少人数で短期間のうちに開館できた秘訣だったようです。当時の長野士郎知事が雷を落としながらも「岡山のことは岡山の君たちが一番知っているし、一番大切に想っているはずだ」とバックアップして下さったことは忘れられない思い出です。

【特任学芸員・吉備国際大学教授 守安収】

私は開館の二年前に開設準備事務局に入りました。開館記念展は「岡山の絵画五百年－雪舟から国吉まで－」で、岡山の絵画史の中世から近現代までを辿り紹介するもので、岡山県の美術文化の豊かさを県民に知っていただくというのがその趣旨でした。一つの県で五百年の歴史を辿れるところは京都などを除くとほとんどなく、岡山県立美術館の収蔵方針と常設展示ともマッチした展覧会でした。私は洋画担当学芸員として、明治以降の近代岡山の洋画の部分を担当しました。続いての展覧会が「瀬戸内風景」展で岡山から範囲を広げて、近代日本画と洋画に描かれた瀬戸内海の風景画を集めて紹介するものでした。開館展は二階と地下の展示室を使つての展覧会でしたから、この展覧会から二階での常設展が始まり、ボランティアの方たちへの講座なども行い、あわせて資料の収集と整理などを通じて自分にとって大変勉強になった日々でした。

開館の頃は、岡山県立美術館の船出という晴れがましさと、毎日が新鮮な体験に満ちていたので、苦勞することもありましたが、職員みな張り切って仕事に精を出していたように思います。当時全国各地に県立、市立の美術館が出来、競い合うようなところがありましたし、共同企画展も盛んに行われはじめ、学芸員同士の交流も活発に行われるようになりました。振り返るといい時期にいい場所で仕事をすることができ大変幸福だったと思っています。 【特任学芸員 妹尾克己】

美作国建国1300年記念協賛展

美作の美術展

2013年5月31日[金]－6月30日[日]



鐵形蕙齋《江戸一目図屏風》

美作国建国1300年記念事業として、全県的に様々な催しが企画されていますが、岡山県立美術館では、美作国に育まれた美術作品を紹介します。古代の仏像に始まり、近世を中心に現代の美術まで、幅広い歴史や文化をたどります。

この展覧会で特に注目していただきたいのは、鐵形蕙齋(1764－1824)という絵師です。蕙齋は江戸生まれの浮世絵師でしたが、津山藩のお抱え絵師に抜擢されるという異例の出世を果たします。彼の作品《江戸一目図屏風》(1809 津山郷土博物館蔵 岡山県指定重要文化財)は、東京スカイツリーにレプリカが展示されたことで話題を呼びました。三大肉筆絵巻《東都繁昌図巻》(1803 千葉市美術館)、《近世職人尽絵詞》(1806 東京国立博物館)、《黒髮山縁起絵巻》(1814 寛永寺)がそろって展示されることは初めてです。

岡山県最古の銅造聖観音菩薩立像(竹元寺)から、寂室元光や平賀元義の書、宮本武蔵や広瀬臺山、津山藩狩野派の絵師の絵画、洋学資料、赤松麟作、棟方志功、有元利夫ら近現代の絵画など、見どころ満載です。ぜひご観覧ください。

【主任学芸員 中村麻里子】

岡山の美術展

OKAYAMA'S ART EXHIBITION

漆芸家難波仁齋 生誕110年記念回顧展

2013年6月7日[金]－7月15日[月・祝]

難波仁齋は、明治36(1903)年生まれで今年、生誕110年を迎えます。当館ではこれまでもご遺族からの受託作品を中心に仁齋の業績を紹介してきましたが、110周年を機に今、わかる事柄や作品をまとめておきたいと考えています。仁齋と親交のあった三重の川喜田半泥子のもとに数点ある以外、作品のほとんどは県内にあると思われま。仁齋が亡くなる1年前、昭和50(1975)年に漆歴55年を記念して回顧展が開催され、148点が出陳されたようです。既に38年を経て、所在がわからないものが多い中、ツテからツテをたどって作品探しをしています。仁齋を知る世代も高齢化し、お祖父さんお祖母さんの代は使っていたけれど、若い世代になると仁齋も知らないし、漆器は扱いが難しいとしまわれっぱなし、お茶をされていた方もだんだんと減って棗や菓子器も使われなくなり、というのが現状かと思っています。

仁齋の作品は、戦前の蒔絵を中心とするものから戦後の描珣醬(かきんま)の作品へとがらりと作風が変化します。仁齋が生きた大正から昭和は、激動の、芸術も価値観も大きく変化した時代でした。まずは1点でも多く作品を発掘すること、その上でさまざまな資料とともに仁齋の生涯を見通したいと思っています。永く教育現場に身をおきながら制作に打ち込み、県下の工芸界の振興に尽力した清心で実直な仁齋のことを、多くの方に知ってもらいたいと準備を進めています。 【主任学芸員 福富幸】